様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　８日現在

機関番号：５８００１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８年～２０１０年
課題番号：２０５１００４５
研究課題名（和文）　サウンドスケープデザインにおける住民の参加と主体性に関するフォーマル理論の構築
研究課題名（英文）　A formal theory on participation and initiative of local residents in soundscape design
研究代表者
西村　篤（NISHIMURA ATSUSHI）
沖縄工業高等専門学校・メディア情報工学科・准教授
研究者番号：７０４１３８８８

研究成果の概要（和文）：本研究はサウンドスケープデザインにおける住民の参加と主体性の意義について示すことを目的とし、関連する３つの国内事例、すなわち「平野の音博物館」（大阪市）、「瀧廉太郎記念館庭園デザイン」（大分県竹田市）、「長崎サウンドデザイン塾」（長崎市）に対する現地調査が行われた。調査結果の分析から、これらの事例には、形式的な違いはあれども、住民による参加と主体性が不可欠であったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This investigation aims to show the significance of local residents' participation and initiative in soundscape design. From three notable case of soundscape design in Japan: Hirano Soundscape Museum project (Osaka City), Rentaro Taki Museum (Taketa City, Oita Prefecture) and Nagasaki Sound Design Project (Nagasaki City). Although there are some formal differences among the cases, it was revealed that participation and initiative of the local residents were indispensable for all cases.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,300,000 円	390,000 円	1,690,000 円
２００９年度	400,000 円	120,000 円	520,000 円
２０１０年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
総　計	2,200,000 円	660,000 円	2,860,000 円

研究分野：サウンドスケープデザイン
科研費の分科・細目：
キーワード：サウンドスケープデザイン・住民・参加・主体性

１．研究開始当初の背景
公害規制から環境管理へと移行する国際的動向の中、音環境デザインの領域においても、騒音源に対する対症療法的なアプローチ（騒音制御）だけでなく、教育や社会づくりを通じて環境やライフスタイルの在り方そのものを問い直すというより包括的かつ本質的な観点からのアプローチへの期待が高まりを見せており、サウンドスケープデザインは先駆的かつ有望なアプローチとして捉えられていると言える。サウンドスケープという用語は、提唱者のシェーファーらによって「個人あるいは社会がどのように知覚し理解したかに強調点の置かれた音の環境」と定義されている（Truax ほか 1978）。「認識主体にとって音が持つ意味」あるいは「認識主体と環境との関係性」という視点から社会を含めた環境全体を調査・研究するだけでなく、サウンドスケープデザインという創造的な領域まで射程に含んでいることがサウンドスケープという思想および方法論の特徴である。音環境デザイナーの鳥越は、サウンド

スケープデザインの考え方を特徴づける最も重要なことは、音や音環境を「その空間で生活し活動する人々の「聴く行為」との関連の中で捉えようとすること」であるとしている。ただ、上述のごとき音環境デザインにおけるサウンドスケープへの注目の高まりにおいて、その概念の理解が十分に浸透しているとは言えないという指摘もある。つまり、サウンドスケープデザインは、「認識の主体」つまり環境に住まう個々人が主体的に参加しなければ成立しないのであるが、環境音楽を流して空間の雰囲気をコーディネートするような事業をサウンドスケープデザインと呼ぶような例も散見される、というのが現状である。当時、サウンドスケープデザインの領域で現在求められていることは、真にサウンドスケープデザインの試みと呼べる事例について精緻な理論的分析を行うとともに、事例間の比較を行ないつつ、環境マネジメントなどより一般的な領域に応用可能なフォーマル理論を構築することが必要と考えた。

２．研究の目的

本研究の目的はサウンドスケープデザインに関して、その最も重要な特徴である「住民の参加と主体性」に着目し、サウンドスケープ以外の領域にも応用可能なフォーマル理論の構築を行なうことである。

３．研究の方法

研究は、事前調査、現地調査、結果分析をもとにした理論構築、の３つのステージから成る。本研究では比較事例について、現地での現状調査、関係者への聞き取り調査を行った。このうち、「長崎サウンドデザイン塾」に関しては、2009 年 3 月 26 日から 27 日にかけて現地調査を実施し、当時の関係者ならびに市で「長崎伝習所」を担当する部署の職員から聞き取り調査を行った。また、「瀧廉太郎記念館」については、2009 年 3 月 23 日から 24 日、10 月 30 日から 11 月 2 日、および 11 月 21 日から 23 日にかけて現地を訪れ、記念館およびその周辺の現状調査（職員への聞き取りを含む）、当時の関係者への聞き取り調査、市の担当者への聞き取り調査、を実施した。理論構築は、サウンドスケープデザインにとって住民参加と主体性がどのような機能を果たしているか、という問いに説明するための理論を構築し、サウンドスケープデザインという特定領域における知見と本研究における調査によって得られたデータの範囲内で検証する。この検証には、再び調査地に赴き、実際に関係者に理論を提示して聞き取りを行いながら、理論の修正を行なうプロセスを含んでいる。これまでの調査研究で得られたすべての結果および関連する諸領域における知見を総合し、より一般的なフォーマル理論を構築する。本研究では、グランディッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach）と呼ばれる質的研究の手法が援用された。グランディッド・セオリー（Grounded Theory）は「データ対話型理論」と訳され、理論を調査データによって立証するといった演繹的な研究法とは対照的に調査分析者がデータとの相互作用から帰納的に理論を産み出そうとする点が特徴である。

４．研究成果

研究の結果、いずれの事例においても、成功したサウンドスケープデザインには、その前提として、音に限らない地域づくり全体に向けての住民による主体的な参加が存在することが明らかになった。これは調査以前から知られているようでありながら、学術的なアウトプットとしては体系的にまとめてこられなかった知識である。瀧廉太郎記念館を例に取ると、音環境デザインを担当したデザイナー自身がそのコンセプトやプロセスについて多くの著述において既に論じていることから、調査の重点は、記念館におけるサウンドスケープデザインがこれまで住民にどのように受容されてきたか、また当時における住民の協力の実態について知ることに置かれた。調査の結果、記念館整備の事業への協力は、地元の人々の地域に対する長年の想いと努力の上に成立したものであることが明らかになった。例えば、旧宅を市が整備のために買収するまでそこに居住していた住民への聞き取り調査では、その住民が「瀧廉太郎の旧宅なのだから、いずれ市が買い取って整備し、市民の財産として役立てたらよい」との想いで長年にわたって土地と建物を守ってきた経緯が明らかになった。具体的には、もともと間借り人として旧宅に住んでいたこの住民は、上記の想いから、家主が土地建物を手放そうとした時に市に購入を持ちかけたり、市から購入を断られると数名でこの土地・建物を買い取ったり、「ビルを建てたい」と言ってその土地を買いに来た人には売らなかったり、といった経緯があった。もしこの住民が土地を手放してしまっていたら、瀧廉太郎旧宅整備事業自体が成立し得なかったであろう。

環境づくりの領域は、実践レベルに置いては、感覚（聴覚、視覚、嗅覚など）、建築、歴史、公害、など様々な専門領域に細分化されて実施される。しかしながら、実際にそこで環境の主体となっているのは、ひとりひとりの地域住民である。その地域住民の参加と主体性なくして、環境の評価も管理も計画もあり得

ないのである。本研究は、理論の検証までその範囲に含める事はできなかったが、サウンドスケープデザインという感覚環境のまちづくりの領域から、その領域の外部にも共通する原理として、環境づくりへの住民の参加と主体性の必要性が位置づけられる事を実証的に示した点に意義が認められる。また国際学会における発表においても、参加や主体性をどのように取り付けるかは重要な課題であるという反応があった。他の専門領域における成果の発表については、計画段階での想定に比して後退した成果となった点が今後の課題と言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）
西村篤・平松幸三，サウンドスケープデザインにおける住民の参加と主体性，独立行政法人国立高等専門学校機構・沖縄工業高等専門学校紀要，第 4 号，13-22 頁，2010 年

〔学会発表〕（計３件）
A. Nishimura and K. Hiramatsu, The significance of local participation and local initiative in soundscape design, World Forum for Acoustic Ecology 2010, Koli, Finland, 2010 年 6 月 18 日

西村篤・平松幸三，サウンドスケープデザインにおける住民の参加と主体性，2009 年度日本サウンドスケープ協会研究発表会，B-nest 静岡市産学交流センター，2009 年 11 月 28 日

A. Nishimura and K. Hiramatsu, The significance of participation and initiative of local residents in soundscape design, The 38th International Congress and Exposition on Noise Control Engineering (INTER-NOISE 2009), Ottawa, 2009 年 8 月 24 日

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
西村　篤（NISHIMURA ATSUSHI）
沖縄工業高等専門学校・メディア情報工学科・准教授
研究者番号：７０４１３８８８

(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし